

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

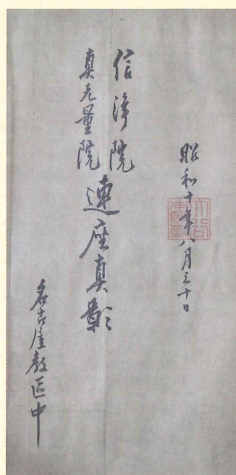
■ 発行人／荒山 淳

■ 発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

* 本紙4、5面に関連記事。



相続講開設五十周年記念
教如・巖如両上人連座御影
(絹本着色、「名古屋教区中」宛)
縦九九・三×横四三・二cm



同 裏書 (紙本墨書)

(写真の無断転用はご遠慮ください)

耳根清徹にして、苦患に遭わず

教化センターの研究生学習会(グループケア)で臨床宗教師としてお寺の外の公共空間で活動する服部あずさ氏(第20組 法敬寺坊主)を講師に学んだ時のことである。「人生を川の流れに喩えるなら日常は清流です。しかし心が苦しい時は濁流と化します。心理士は、その違い目をジャッジし、状況、状態を客観視してよりよいケアを行います。しかし臨床宗教師はジャッジしない。

『仏説無量寿経』に、
仏道を成るに至りて、耳根清徹にして、苦患に遭わず(中略)一切みな甚深の法忍を得、不退転に住せん。
(『真宗聖典』三五頁)
とある。仏道至成の者は、眼前の人の話を善と悪に仕分けジャッジしながら

聞かない。計らわず事実を事実として聞くのである。聞くことで苦患が無くなるのでもない。苦患の事実の中に人間にとって甚深な法忍を得ることによって新たな方向性を賜わり人生を退転させない。数々の苦患をかくぐり初めて耳根が清徹となるのである。
この法忍とは、一つには音響忍、二つには柔順忍、三つには無生法忍であると法語は続く。現前の人の悲しみに私は寄り添えるのか。悲哀の音声に我が心は響鳴しているか。柔らかな心で、現前の人の悲心に順っているか。その人の心の叫びを足したり引いたりしていいないか。それも決して自分の力で寄り添うわけではないと「これみな無量寿仏の威神力のゆえに、本願力のゆえに」と経言は、お示しくださる。仏の覚りとして語られる音響忍・柔順忍・無生法忍と「ゆつたりと心休まる、ちようど縁側で日向ぼっこしながら生きていることの温もりと歓びを感じたい」心が通じ合ってくるのである。
(主幹 荒山 淳)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

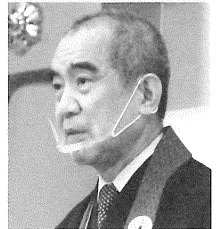
もくじ

- ・ 聖典研修
『教行信証』撰述の願い ②・③
第7回 真実の行二
- ・ 研究報告
相続講開設五十周年記念 ④・⑤
教如・巖如両上人連座御影
- ・ 研修報告
教化センター第十四期 ⑥・⑦
研究生 報告
- ・ INFORMATION ⑧

聖典研修
2021年3月8日

『教行信証』撰述の願い

第七回 真実の行二

講師 一楽真氏いちらく まこと（大谷大学教授）

本当の行とは何か

「行巻」は本当の行とは何かを課題としています。真実に迷いを超えることができる行とは何なのかということです。南無阿弥陀仏という名号を通して仏の呼びかけをいただいでいく。これが、我々が迷いを超えていく本当の行なのです。南無阿弥陀仏と称えることは実は仏からの呼びかけなのだとも明確にしてください。

これが親鸞聖人の「行巻」のお仕事です。呼びかけを誰が届けてくれるのか。私に先立って阿弥陀に出あわれた方、阿弥陀の大事さを褒め讃えておられる方です。これを諸仏と親鸞聖人はいわれます。

諸仏が称えられるお名前を聞かせていただくということが「行巻」にはすぐに出てきます。ただ、諸仏の「称名」だから我々衆生は「聞名」だといってしまふと話が厄介で、私たちが称える念仏はどうなるのかということが残ります。親鸞聖人はそれを二つに分けておられません。称えることが全部お勧めの言葉と受け取っておられるわけです。

「帰命」は本願招喚の勅命なり。

（『真宗聖典』一七七頁）

阿弥陀仏の本願が我々を招いてくださる、呼んでくださっている。勅命とは絶対命令です。この元が、善導大師の「六字釈」といわれています。

また云わく、「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり。この義をもつてのゆえに、必ず往生を得、と。

（同一七六頁）

南無は意味を取れば帰命です。またここに発願回向という願いが具わっているとおさえ、そして阿弥陀仏が行であるといっておられます。当時、撰論学派から南無阿弥陀仏と称えるあり方は願いがあつても実践（行）が伴わないから実を結ばないと、批判を受けました。それに対して善導大師が願と行が具わっている（願行具足）と答えた文章です。

これは行とは何かということを根っこから問い返そうとするものです。これを受けて親鸞聖人は帰命が発願回向であるといわれています。

「発願回向」と言うは、如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心なり。

（同一七七頁）

如来が願いを發されて、衆生の行を回施して下さっている。なぜか。私たちの行は全部虚偽雑毒だからです。そういう私たちを見越して如来が、これが迷いを超える行だ、と教えてくださっています。

「即是其行」と言うは、すなわち選択本願これなり。

（同一七八頁）

これは阿弥陀仏が行、選択本願としてはたらいっているわけです。念仏申せ、我を念ずるものは一人も分け隔てなく迎えるとはたらいてくださっているわけです。そのはたらきに領くかどうかだけが我々に残されている課題です。

一声の念仏で阿弥陀に出あう

おおよそ往相回向の行信について、行にすなわち一念あり、また信に一念あり。行の一念と言うは、いわゆる称名の遍数について、選択易行の至極を顕開す。

（同一九一頁）

ここで行信を一つにして語られています。一声の念仏で阿弥陀に出あうということが起れば、今まで何十年迷つてきていても、こんな世界があつたのかと一瞬にして開けることが起るわけです。言いかえれば、娑婆世界の価値観に振り回されることの痛ましさを知らされる。これは一瞬なのです。

しかし私たちはまたあつという間に娑婆の価値観に戻る。だからまた一声一声

お念仏をいただいでいかなければならぬ。これが続けば命終わる時までの念仏です。それをあえて言えば多念なのです。一念一念が継続していくところに「ああ、一生のお念仏だったな」となる。回数の話ではないということが大事なのです。

でも一念と書いてあると、一回でいいのだと頑張る人も出てくる。だから乃至といわれる。一遍称えて阿弥陀に出あうところに、聞名として、その一声に聞いていくのです。

かるがゆえに『大本』（大經）に言わく、仏、弥勒に語りたまわく、「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。

（同一九一頁）

これは名号を聞いて、そして一声の念仏を申すという順序で説かれています。でもこの称えることと聞くことは別ではないでしょう。一声のところに永らく迷ってきた迷いを翻して目が覚め、広い世界に出ることができるといことが、「大利無上の功德」という言葉で『大經』には語られます。

親鸞聖人はこの後に、同じく善導大師のお言葉を挙げます。それは信心をあらわすお言葉です。行の一念を確かめる時に、信心を述べていかれるのです。

智昇師の『集諸經礼懺儀』の下巻に云わく、深心は、すなわちこれ真実の信心なり。

（同一九二頁）

といい、真実の信心について二つのこと

がいわれています。一つ目が我が身に対する信心で、「機の深信」と言われます。

自身はこれ煩悩を具足せる凡夫、善根薄弱にして、三界に流転して火宅を出でずと信知す。(同 一九二頁)

信心とは、ここに「信知」ともいわれるように、はっきりと分かるということ。阿弥陀の呼び声を聞いていくと言いましたが、我が身を聞くのです。だから聞法ということの要もここに極まります。

いま弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、一念に至るに及ぶまで疑心あることなし。

(同 一九二頁)

そこに阿弥陀の本願によって名号を称える者が定んで往生するのだと、疑いようがなくはつきりしたというのが二つ目の信知の意味です。すぐに自分中心のものの見方に埋没してしまう、そういうあなたの為に本願の教えがあるのだということ。だから一つ目の機の深信と二つ目の法の深信は同時です。自分はいくつになっても危ういということが本当に分かった時に本願に導かれなければならぬということが決まるのです。

ここで『観経疏』の二種深信の文を引かず、智昇大師の『集諸経礼懺儀』から引いているのはなぜかというと、「下至十声聞等」という、「聞」という字が入っているからです。聞くということが実は根本なのです。十遍称えても私たちは何遍

聞いているのでしょうか。頑張つて称えておつても南無せよという呼びかけとして聞いていることが多くありませんか。たとえ声が出なくなつても念仏は誰の上にも成り立つのです。

諸仏の上に仏のはたらきを見る

仏の呼びかけを聞くことが、迷いを超えていく根本の行だと宗祖はおっしゃっています。称名念仏といつてもそれはどこまでも聞くということが中身です。聞けばそこに必ず「ああ、そうだったのか」と領かれる。それを「信知」といつておられるのです。ここに成り立つ利益が後半で展開されてきます。その前の結釈に、

しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、

(同 一九二頁)

とあり、阿弥陀仏の本願の船に乗つて光明の広い海に浮かぶということです。光明の海というのは、ものが見えるということでしょう。逆に言えば、私たちは日ごろ見ているつもりで何も見ていないのです。人のことも自分のこともです。ここに、

至徳の風静かに衆禍の波転ず。

(同 一九二頁)

とあります。徳の風が静かに吹くのです。そこにたくさんさんの災いが転ずるのです。この転ずるということが、称名念仏の具体的な利益なのです。

すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す

(同 一九二頁)

これが往相回向の利益の最たるものです。大般涅槃まで至るわけです。凡夫が本願の船のお力によって仏の覚りを証すると、ここまでいわれています。さらに、

普賢の徳に遵うなり。知るべし、と。

(同 一九二頁)

と、今度は還相回向の利益として語られます。慈悲の極まりである普賢の徳をいただいていく。

私は往相回向の利益と還相回向の利益というのは同時にあると言わなければならぬと思います。往相回向の後に還相回向があるなんていうと、それはいつのことですかと必ずあります。それは死んだ後だという方もいます。でも親鸞聖人が法然上人に諸仏としてのおはたらきを見ておられたとすると、法然上人ご自身は、私は誰かを救つてやっているとは言いません。ご自身が南無阿弥陀仏をいただいて阿弥陀の世界を願つて生きておられるわけです。でもそのお姿がそのまま周りに対してはお念仏の阿弥陀の世界をお勧めめくださるはたらきであります。浄土に向かう方向がそのまま、この娑婆世界の真つ只中で仏のおはたらきを広めていかれるお仕事なさっている姿なのでしよう。もちろん、亡き人に還相の徳を仰ぐということ、これを私は否定するものではありません。大事な話です。しかしそ

れは亡き人に限定する必要はありません。少なくとも親鸞聖人は法然上人の上に阿弥陀如来のおはたらきを見ておられる。

往相も還相も如来のおはたらきであります。如来のおはたらきをいただいて迷いを超えていくということが、今度は周りの人に仏法との縁を結ぶことも起るということ。これはどこまでも仏法の力、本願のはたらきでありまして、私がしてやったということは絶対に言つてはいけない。これが還相回向の問題の難しいところでもあります。ここに「普賢の徳に遵う」という、還相回向の利益の言葉が「証卷」に先立つて出ているということに注意していただきたいのです。

次に、親鸞聖人は、

他力と言うは、如来の本願力なり。

(同 一九三頁)

とおっしゃられます。先輩方はここを「重ねて要義を釈す」といつてくださっています。なぜこれを重ねていうのか。それは他力ということを確認しておかないと誤解されるということです。そして誰の上にも平等に、ということを念押す形で確かめるのが、一乗海釈(一九六頁)であります。

これが、法然上人が開いた浄土真宗、ただ念仏の教えの大事なところなのです。これを共々にいただいていきましようという願い、これが『教行信証』には貫かれていますということ強く思うわけがあります。

研究報告

尾張の真宗 法宝物調査レポート

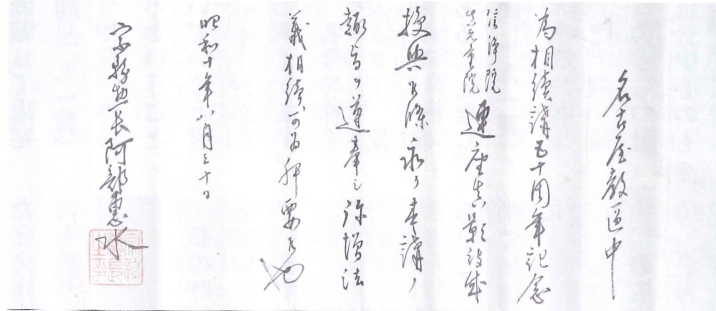
―相続講開設五十周年記念教如・厳如両上人連座御影―

小島 智

今回紹介する法宝物資料は、現在名古屋教区の第七組と第二十九組で共有される、教如・厳如両上人の連座御影である（*本紙1面に写真）。この御影は名古屋教区の旧七組（稲沢市・昭和二十八（一九五三）年、現七組と二十九組に分組）寺院で巡回され、年一度、これを奉懸しての法要が、旧七組寺院の参勤と地域門徒の参詣のもと勤められている。本稿では限られた紙幅の中、この御影の由緒を尋ね、法要の意義を確認していこうと思う。

はじめに、この御影の様相と由来を見ていきたい。画面の構図は1面写真に有るように、上部右手に東本願寺第十二代の教如上人を描き、下部左手に第二十一代厳如上人を描く連座の御影である。

*写真A



讚・銘ともに欠くが、裏書（1面写真）より信浄院（教如上人）・真無量院（厳如上人）の連座御影であることが分かり、さらに昭和十（一九三五）年八月三十日に本山「大谷本願寺」より、「名古屋教区中」に下附されたものであることも認識できる。

また、この御影には当時の真宗大谷派宗務総長・阿部恵水による添状（写真A）があり、内容は以下の通りである。

名古屋教区中

為相続講五十周年記念

信浄院連座真影被成

授与候条永ク本講ノ

趣旨ヲ遵奉シ弥増法

義相続可為肝要候也

昭和十年八月三十日

宗務総長 阿部恵水（印）

ここから本連座御影が、相続講開設五十周年を記念して下附されたものであることが分かるのである。

周知のように相続講とは、幕末の禁門の変で焼失した真宗本廟（東本願寺）御影堂・阿弥陀堂の再建事業（明治十三（一八八〇）年・明治二十八（一八九五）年）資金調達を主目的に、『法義相続』『本廟護持』の願いのもと、明治十八（一八八五）年、厳如上人によって創設された制度である。その相続講が五十周年を迎えるにあたって、昭和十一（一九三六）年四月に記念法要を厳修することが決まり、さらに前年の昭和十年八月、その拡張を企図して全教区に向け、真宗本廟開創の教如上人と厳如上人の連座御影が下附されることになったのである。そして、教区内各組を中心とした単位で、それを奉懸しての開法場が開設されることが求められたのである。

その辺りの経緯については、昭和十年八月二十八日付真宗大谷派宗務所書立に詳しく、名古屋教務所発行の『名古屋教報』第五五号（昭和十年十月）に掲載されているので、次に確認しておきたい。

相続講ノ儀ハ去ル明治十八年 厳如上人ノ御創設ニカ、リ普ク門葉ヲシテ其趣意ヲ体セシメ益歴代伝灯ノ法義ヲ相続シ 教如上人辞禄ノ御遺志ヲ紹キテ本廟ノ護持ニ資セシメント企画遊サレ候トコロ有縁ノ道俗競ウテコノ講員ニ列リ星霜加ハリテ茲ニ五十回ノ年時ヲ重ネ候

前住上人亦コレカ改正ヲ施シ講運ノ再興ヲ期セラレテヨリ更ニ二十五周年ノ歲月ヲ経タルヲ以テ之ヲ記念スルタメ来年四月ノ候ニ於テソノ法要ヲ厳修シ斯機会ニ益本講ノ拡張ヲ企テ特ニ連座ノ御影ヲ奉安シテ永クソノ宏慮ニ対先法義ノ相続ニ在リテハ各組ヲ中心トシテ本山特派ノ法席ヲ開キ僧俗一同之ニ参集シテ愈聞法ノ縁ヲ深クシ一流安心ノ正意ヲ決得シ本廟ノ護持ニ就テハ門葉ヲシテ悉ク此講員ニ加ハリテ報謝ノ懇念ヲ運ハシメ以テ法義ノ興隆ト宗基ノ培養ヲ期セラレタキ尊慮ニ有之候

サレハ御門末一同此御趣意ヲ仰キ同心強力以テ本講ノ隆盛ヲ援ケ念仏相続ノ上ヨリ国家並宗門ノ為尽瘁致サレ候ハ、真俗ニ諦ノ教旨ヲ奉スル当流門末ノ本分ニ相契ヒ御本懷タルヘク候事

昭和十年八月二十八日 宗務所

ここに、「本山特派ノ法席ヲ開キ僧俗一同之ニ参集」することで皆が本講員に加わり、次いで「報謝ノ懇念」を運んで「法義ノ興隆」と「宗基ノ培養」が期せられたとあるように、実際、この後すぐにこの御影を掛けての法要が展開されたようである。名古屋教区でも、昭和十年秋より春と秋の年二回（基本三月と九月）、本山からの特派講師を招き、教区内各組（当時は全二十二ヶ組）を順番に回りながら勤められたことが、『名古屋教報』の記述より見て取れる。ただ、『名古屋教報』に

明確に日程が記されるのは、昭和十六（一九四一）年三月の第一〇九号（誤植・正確には一一〇号）までであり、次第に戦時体制下に入っていく中で記録にも表れなくなり、『名古屋教報』自体も昭和十七年十一月の一二二号をもって廃刊となり詳細は不明である。

しかし、旧七組においては、それ以後も毎年「連座法要」（当初は「連座御影供奉」や「連座御影御巡化」と呼ばれた）として勤められてきたことが、独自に伝えられてきた『本山特派記録帳 第七組』と題する記録から読み取ることができ、現に今に至るまで受け継がれているのである（ただし昭和二十九年より「連座法要」は春のみで秋は「講釈」を勤めるようになる）。

ところで、この連座御影を奉懸しての法座が名古屋教区だけでなく、全教区を通じてのものであったことを窺わせる法宝物資料が、当センターに所蔵されている。それが写真Bの教如・厳如両上人連座御影であり、その裏書（写真C）から「岐阜教区中」宛に、「名古屋教区中」宛の連座御影と同時に下附されたものであることが分かるのである。表画の構図も1面写真の連座御影と全く同じであり、写真の掲載はないが、添状も宛先が「岐阜教区中」になっている以外は同様である。

これは昨年二月に名古屋市千種区在住の有志者より当センターへ寄贈され、昨年度の資料整理において所蔵法宝物とし

て登録完了した御影である。寄贈者によると、元々は亡き父が所有していたもので、真宗大谷派岐阜別院の隣に居住していたことから譲り受けたのではないかと、このことであつたが、それ以上は不明である（ちなみに真宗門徒ではないという）。

当然、岐阜教区各組でも昭和十年秋より本山特派講師を招いての連座御影法要が厳修されていたであろうが、いつ頃からか消滅し、御影自体も譲り渡されたのではないかと考えられる。

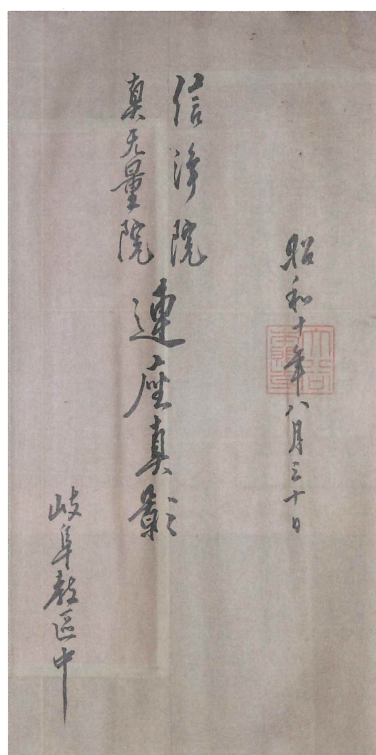
*写真B

相続講開設五十周年記念教如・厳如両上人連座御影（絹本着色、「岐阜教区中」宛）

縦九八・三×横四二・二 cm



*写真C 同 裏書（紙本墨書）



この連座御影の法要が当初の規模から極端に衰退してしまった要因としては、下附されてすぐに否応なく背負わされてしまふ時代背景もあると思われる。昭和六（一九三一）年九月の満州事変以降、日本は中国侵略をさらに露骨化し、昭和十二（一九三七）年七月の盧溝橋事件を契機に中国との全面戦争に突入する。そのような中、昭和十二年秋の法要では「国威宣揚」「教化報国」の講演会も併催され、『名古屋教報』第七三号（昭和十二年七月）および『本山特派記録帳 第七組』昭和十二年九月一七日条、以後この傾向は強まっていったようである。その為、次第に『法義相続』『本廟護持』の宣布というよりは、戦時体制強化の側面が強くなり、そちらが主目的となっていくたと思われるのである。すでに前述の宗務所書立に「真俗二諦ノ教旨」と謳われているので、ある意味当然の帰結とも言えるが、戦後は戦時体制を象徴する法要と見なされ、自ずと敬遠されるようになってしまったと推測される。

しかし、名古屋教区の旧七組寺院では敬遠されることなく、この連座御影下附そもそのの願いを踏まえて連綿と受け継ぎ厳修してきたわけであり、賞賛されるべきことであろう。そして、なぜ旧七組では途絶えることなく勤められてきたのか、また、どのような形で勤められてきたのか、というのが気になるのであるが、それについては尾張講組織の一形態として（旧七組寺院を講中とする講組織と見ることが出来る）、機会を改めて考えてみたい。

研修報告

教化センター第十四期研究生 報告

二〇二二年四月より、教化センター第十四期研究生が始まった。年齢やこれまでの歩みが異なる様々な方々が集まり、各々の立場から独自の意見を交わし、これまで学びを深めてきた。今号では、第十四期生が研究生として学んだ一年間を振り返っての感想、ならびに今後の課題の一部を報告する。

研究生として学習を始めるにあたり、真宗門徒となつてまだ半年であつた私は初志を忘れないよう、いくつかの約束事を自らに課しました。この一年間を振り返り、「できたこと」は次のとおりです。(1) 先入観や固定観念を排除し、見るもの、聞くもの、感じるもの全てを受容する。(2) 自分の感性を大事にする。(3) 講義は休まず出席する。そのための体調管理・スケジュール管理をきちんと行う。(4) 柔軟な発想や視野を広げるため、各種講義等に参加する。(5) 教化センターを活用する。おかげさまでセンター所蔵の多くの名著と出遇うことができました。教化センターの存在が無ければ研究生になることもなく、仏教の奥深さを知ることでもできなかったと思います。

次に「できなかったこと」です。(1) 一年目は読むことと書くことを中心に学んできました。今後の方向性を見つづけるためにも、さらに「聞く・話す」と「伝える(教える)」ことを実践し、アウトプットの学習につなげたい。(2) 別院の定例会話の聴聞。そのための時間を設けたいと

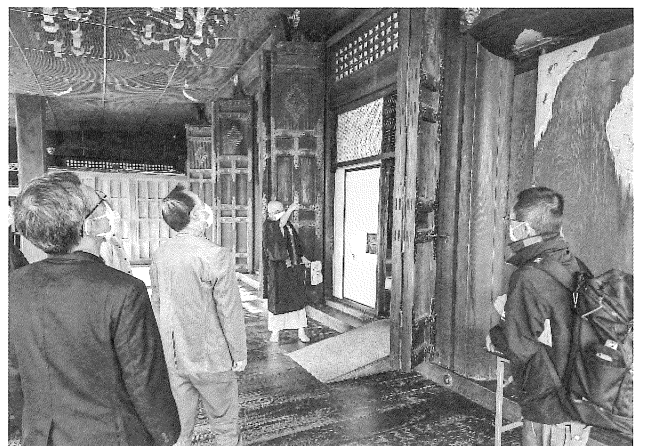
思います。(3) 本山参拝。体調面の不安もあり、団体参拝を躊躇しています。時間・予算を含め、どう増やすかが課題です。以上の通り、試行錯誤と葛藤の連続でしたが、今後も引き続き学習を継続してまいります。

池上 秀隆
いけがみ ひでたか

研究生の一年を振り返ってみて、皆さまとこうして一緒に学ばせていただいたていること自体、今さらながらではありませんが不思議に思います。

学習会では『観経』の「序分」を学んでいます。そこで聞いたお話を通して、「この『観経』に出てくる人全てがあなたですよ」と知らされました。他にも、「阿弥陀仏にお会いしたいならば四十八願を聞き続けなさい」「『大経』の下巻に私たち衆生の救われていく道が示されています」など、先生方から学びの方向を教えてくださいたいと感じています。目的も分からず、自我で頑張ろうとしている私ですが、どうぞよろしく願ひいたします。

尾関 邦子
おぎ くにこ



西本願寺参拝 (2022年11月 上山研修にて)

普段は法務の中、ご縁のあった方から多くの学びをいただけてきました。しかし、教学の学びと生活の中での学びとを繋げていく「自信教人信」の教えを深めるにあたっては、自身の浅学さを感じていました。

研究生には様々な人生経験をされて学びに来られた方も多く、そのように真摯に学びに向き合う姿こそ、私の知見をさらに深める機縁になったと感じる一年でした。もちろん、普段の法務の中で得られる学びも大切なものですが、この研究生の学びの中、特に座談会が、教学の学びと生活の学びとを結び付けてくださる貴重な機会だと感じました。この研究生の学びを、法務などでご縁をいただいた多くの方に還元できたと思っています。

加藤 心華
かとう しんげ

浄土真宗の門徒として親鸞聖人の教えを学ぶために、研究生に応募しました。学習会並びに各講座を聴講して気付かされたことは、自分の愚かさでした。研究生になって、「南無阿弥陀仏を称えれば必ず救われる」このことの確証を得るために学ぼうとしましたが、裏を返せば、確証が得られなければ信心が定まらない、分別でしか生きられない私がまさに「邪見憍慢愚衆生」であるのだと自覚しました。信心未決定ではせっかくの学びも客観的な教学としてしか捉えることができず、主観として受け入れることができない、心に響かない、体に蓄積されない。もったいないことです。「難中之難無過斯」ではありませんが、一日も早く信心決定するよう残り二年間を学びたいと思います。

佐藤 和生
さとう かずお

ケガや仕事の都合でなかなか参加できない私でもいつでも温かく迎えていただき、一緒に勉強できますこと大変感謝しています。学習会の内容は理解できている部分とチンプンカンプンな部分があり苦戦しています。それでも撮影した講義動画を後日に配信していただくことで、その場で理解できなかった部分を見直し、少しずつ分かる部分が増えてきています。また分からないことを自分で調べたり、他の方に聞いてみたりする自分があることにびっくりしています。ゆっくりですが研究生のヒヨコぐらいになってきたのかなと感じています。

私は父親の葬儀がきっかけとなって、お

がいわれています。一つ目が我が身に対しての信心で、「機の深信」と言われます。

自身はこれ煩悩を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流転して火宅を出でずと信知す。(同 一九二頁)

信心とは、ここに「信知」ともいわれるように、はつきりと分かるということ。阿弥陀の呼び声を聞いていくと言いましたが、我が身を聞くのです。だから聞法ということの要もここに極まります。いま弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、一念に至るに及ぶまで疑心あることなし。

(同 一九二頁)

そこに阿弥陀の本願によって名号を称える者が定んで往生するのだと、疑いようがなくはつきりしたというのが二つ目の信知の意味です。すぐに自分中心のものの見方に埋没してしまう、そういうあなたの為に本願の教えがあるのだということ。だから一つ目の機の深信と二つ目の法の深信は同時です。自分はいくつになっても危ういということが本当に分かった時に本願に導かれなければならぬということが決まるのです。

ここで『観経疏』の二種深信の文を引かず、智昇大師の『集諸経礼懺儀』から引いているのはなぜかという、「下至十声聞等」という、「聞」という字が入っているからです。聞くということが実は根本なのです。十遍称えても私たちは何遍

聞いているのでしょうか。頑張つて称えておつても南無せよという呼びかけとして聞いていないことが多くありませんか。たとえ声が出なくなつても念仏は誰の上にも成り立つのです。

諸仏の上に仏のはたらきを見る

仏の呼びかけを聞くことが、迷いを超えていく根本の行だと宗祖はおっしゃっています。称名念仏といつてもそれはどこまでも聞くということが中身です。聞けばそこに必ず「ああ、そうだったのか」と頷かれる。それを「信知」といっておられるのです。ここに成り立つ利益が後半で展開されてきます。その前の結釈に、

しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、

(同 一九二頁)

とあり、阿弥陀仏の本願の船に乗って光明の広い海に浮かぶということです。光明の海というのは、ものが見えるということでしょう。逆に言えば、私たちは日ごろ見ているつもりで何も見ていないのです。人のことも自分のこともです。ここに、

至徳の風静かに衆禍の波転ず。

(同 一九二頁)

とあります。徳の風が静かに吹くのです。そこにたくさんさんの災いが転ずるのです。この転ずるということが、称名念仏の具体的な利益なのです。

すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す

(同 一九二頁)

これが往相回向の利益の最たるものです。大般涅槃まで至るわけです。凡夫が本願の船のお力によって仏の覚りを証すると、ここまでいわれています。さらに、

普賢の徳に遵うなり。知るべし、と。

(同 一九二頁)

と、今度は還相回向の利益として語られます。慈悲の極まりである普賢の徳をいただくしていく。

私は往相回向の利益と還相回向の利益というのは同時にあると言わなければならぬと思います。往相回向の後に還相回向があるなんていうと、それはいつのことですかと必ずなります。それは死んだ後だという方もいます。でも親鸞聖人が

法然上人に諸仏としてのおはたらきを見ておられたとすると、法然上人ご自身は、私は誰かを救つてやっているとは言いません。ご自身が南無阿弥陀仏をいただいて阿弥陀の世界を願つて生きておられるわけです。でもそのお姿がそのまま周りに対してはお念仏の阿弥陀の世界をお勧めめくださるはたらきであります。浄土に向かう方向がそのまま、この娑婆世界の真つ只中で仏のおはたらきを広めていかれるお仕事なさっている姿なのでしょ

う。もちろん、亡き人に還相の徳を仰ぐということ、これを私は否定するものではありません。大事な話です。しかしそれは

れは亡き人に限定する必要はありません。少なくとも親鸞聖人は法然上人の上に阿弥陀如来のおはたらきを見ておられる。

往相も還相も如来のおはたらきであります。如来のおはたらきをいただいて迷いを超えていくということが、今度は周りの人に仏法との縁を結ぶことも起るということ。これはどこまでも仏法の力、本願のはたらきでありまして、私がしてやったということは絶対にはいけない。これが還相回向の問題の難しいところでもあります。ここに「普賢の徳に遵う」という、還相回向の利益の言葉が「証巻」に先立つて出ているということに注意していただきたいのです。

次に、親鸞聖人は、

他力と言うは、如来の本願力なり。

(同 一九三頁)

とおっしゃられます。先輩方はここを「重ねて要義を釈す」といつてくださったといいます。なぜこれを重ねていうのか。それは他力ということを確認しておかないと誤解されるということです。そして誰の上にも平等に、ということを念押す形で確かめるのが、一乗海釈(一九六頁)であります。

これが、法然上人が開いた浄土真宗、ただ念仏の教えの大事なところなのです。これを共にいただいきましようという願い、これが『教行信証』には貫かれていますということ強く思うわけあります。

【文責編集部】

研究業務報告(2023年6月～11月)

①大谷派の近現代史

◆「あいち平和のための戦争展」に出展

同実行委員会主催

8月10日～8月13日

市民ギャラリー矢田

◆平和展学習会 実施

7月5日・8月7日・9月27日・

10月5日・10月18日・11月13日・11月30日

②尾張の真宗史

◆教区内外の真宗大谷派寺院所蔵法宝物の調査

★調査の一部を本紙4・5面に報告

③現代社会と真宗教化

◆「グリーフケア学習会」開催

講師 吉田 暁正氏(業務嘱託[研究])

10月30日 名古屋別院対面所

30名申込み

「グリーフケア」という言葉は以前より、病气や死、葬送に関わる分野で使われ、真宗大谷派宗門でも課題として取り上げられてきた。今回の学習会はその言葉によるはたらき、また願われていることを教区として共用してゆく機会として開かれた。当日は、すでに同様の課題に向き合っている者、初めて学ぶ者などがともに学びを深めた。今後も継続して学びの場を設ける予定。

★「グリーフケア」に関する記事を本紙次号にて掲載予定



INFORMATION

◆聖典研修

テーマ 『正信偈』を読む

講師 梶原 敬一氏(姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶)

会場 名古屋教務所議事堂

時間 午後6時～8時

期日 第三回 2024年1月19日(金) 第四回 3月15日(金)
第五回 5月24日(金)

《雑感》 本紙は名古屋教区教化センターの事業を名古屋教区の皆さんに伝えるということを主な使命としている。内容を読みながら改めて思うのは、教化センターとはどういうところなのかということである◆そんなことを話している機会には、はからずも聞いた表現が、教化センターは「教区の宝、という言葉である。今の時代、教区の宝、ひいては「世の真宝」たるには何を聞き、何を考えねばならんのか。ぜひ皆さんのご意見をお寄せください。(mm)

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

【お東ネット】 <https://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

研修業務報告(2023年6月～11月)

①聖典研修「『正信偈』を読む」開講

講師 梶原 敬一氏

(姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶)

第一回 9月8日 55名聴講

第二回 11月17日 43名聴講

*2023年度は全五回を予定/名古屋教務所議事堂

②第14期 研究生(二年目)学習会

◆お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる

～私の悩みを大切に～

講師 池田 真氏(第13組 萬瑞寺住職)

7月14日・9月20日・11月22日

◆観経序分に学ぶ～『現代の聖典』を読む～

講師 荒山 淳主幹

6月2日

◆グリーフケア

8月28日 講師 吉田暁正氏(業務嘱託[研究])

10月20日 講師 服部あずさ氏(臨床宗教師/第20組 法敬寺坊守)

★第14期 研究生が一年目の研修を振り返る感想等を本紙6・7面に掲載

長尺印刷機が新しくなりました。

新しい機種になり、これまで以上にきれいな画像で印刷できます。A1(59.4cm×84.1cm)サイズまで印刷できるので、お寺の行事に関わるポスターや横断幕、懸垂幕を作成できます。ぜひご利用ください。

原稿作成等でご不明な点がございましたら、お気軽にお問合せください。

◆第35回 平和展 2024年3月19日(火)～25日(月)

「平和展」は大谷派の過去の戦争協力を検証し平和とは何かを考える展示会です。毎年、テーマを変えて春彼岸の時期に開催しています。本年のテーマは「真宗大谷派の海外侵出—満州開教(後編)—」です。大谷派は「満州」と呼ばれた地域(現在の中国東北部)で宗教活動を行い1939(昭和14)年の時点で、「満州」に5つの別院と50近くの布教所を開設しました。「満州」で盛んに信仰されたチベット仏教(ラマ教)を傀儡化し、彼ら信仰のあり方にまで踏み込んでいった大谷派僧侶など、日本軍の侵攻によって獲得した占領地の宗教者などどんな関わりを持っていたのかという点に注目する展示をします。



ハルビンの中国寺院・極楽寺

【「平和展」特別学習会】

日時 2024年3月22日(金) 午後6時～8時

会場 名古屋別院対面所

講師 石濱 裕美子氏

(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

テーマ 日本仏教界の「ラマ教工作」

■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00

〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間

教化センターSNS

